

さけよ、さかなよ、さいわいよ、さいなんよ

鴨 澤 巖

社会調査に従事していると、調査の周辺でもさまざまなことが生じ、哀歓を投げかけてくる。

1980年の暮にギリシャでの調査をおえて、正月、トルコのイズミルにたどりついたぼくは、常宿のペンションに投宿した。主人のFさんはきわめて温厚な人であるが、ぼくの要望をききだし、農産加工の大会社にわたりをつけ、連れていってくれたりした。夜ともなれば声がかかって、いっしょにラクを飲もうという。ラクは、ぶどう酒を蒸溜してつくったトルコ人の——もっともトルコ人だけのというのではないのだが——民族的な酒である。ときには、ラクだけでなく夕飯までごちそうになる。そこで、日によってはぼくが、2、3キロの魚を買い求めてきて「から揚げ」にして、主人夫妻ばかりか宿泊人御一同にも、といっても数人なのだが、ふるまったりする。こういうつきあいのなかで、トルコの人びとの考え方が素顔でわかってくる。異文化を知る絶好の機会である。

このときは9泊もいたので、最後の夜にFさんは「あすから誰とラクを飲めばよいのだろう」とつぶやいた。ホロリとさせるせりふである。

このペンションの雰囲気は最高だが、給湯時間の長さも給湯量も最低で、入浴など及びもつかないのが玉にきずだった。そのころのトルコときたらたいへんな外貨不足で、石油の輸入は抑えに抑えられていた。このペンションでも、ボイラーにたく燃料は払底していた。

イズミルをあとにしてイスタンブールに着くと、何はさておきふるとばかりに、清水の舞台から飛び降りでもする覚悟で、高級ホテルに泊まった。観光政策の一環として、高級ホテルには燃料は特別に配給されており、湯もふんだんに出ることを知っていたのである。

高い「入浴代」をはらったとなると、食事はどこか安い所ですませることになる。金角湾のボスボラス寄りの、有名なガラタ橋は上下二層になっていて、下のほうは食

堂街である。安くてうまい魚がたべられる。

とある一軒の店に入って、店主や店主の息子とおしゃべりしながら、ラクを飲み、焼魚をつつついていた。するとそこに、ごきげんなふたりづれの男たちがあらわれ、日本人とみてヒロシマなどと話しかけてくる。平和外交使節の一員にでもなったつもりで応答する。社会調査はたんなる技術ではないから、調査対象の社会の人びとに密着する必要がある。しかし、それにしてもこの宵、ぼくは密着しすぎたのであった。

漁船員だというこのふたりづれは、やけに調子がよく、かれらのテーブルにぼくを招んでラクをごちそうしてくれた。すっかりよい気分になってしまったが、ふと気付くと男たちの姿はなかった。「さて、帰るとするか」などと独りごとを言いながら、椅子の背に掛けておいたレインコートに手を通す。癖で、ポケットに手を入れる。

「おや、かぎがない」。その辺に落ちているかと探していると、気のよい亭主と息子もいっしょに探してくれるが、ない。かぎの代わりに発見したのは、レインコートのポケットに孔があいていて、それはナイフで裏から切りさいたものだという事実であった。「あんたはなぜ席を移ったのかね。あんな連中といっしょに酒を飲むからこんな目に遭うのだ」と亭主に説教されて、一言半句返す言葉もない。

さはさりながら、長年のトルコの経験で、これははじめての事故だった。用心にすぎで、現地の人びとと親しくまじわりもせず、というのではやはり具合が悪いのではないだろうか。

ちなみに、虫のしらせか、旅行に出るときに保険に入っていたので、レインコートは新品に変わった。なくなったかぎは、スベアをもっていたため困りはしなかった。「経験」だけが残ったかんじようである。

(法政大学)

メキシコ市の大気汚染

河 村 武

旅には未知のものに出遇うたのしみがあふ。昨年11月に国際会議のためにメキシコ市を訪れたときもそうであ

った。

ロサンゼルスからメキシコに向かう飛行機の窓から見